

令和四年度 大学生事業活動実施報告書

実施主体：東北文化学園大学 エコ・カフェ菟川

事業名：令和 4 年度 福島県大学生事業「集落自主活動に係る伴走支援事業」

対象集落：二本松市針道九区

活動実施者：3 年次 6 名、4 年次 5 名、卒業生 3 名（計 14 名）

I. 令和 4 年 6 月 18 日（土）～19 日（日）

- 第 23 回東和公民館まつり「里山の魅力を語る懇談会」に参加し、里山や遊休地を活用した地域振興の先事例に学び、今年度の活動に関する示唆を得ることができた。（東和文化センター）
- 現地の施設（道の駅ふくしま東和、今井公園、古民具館、夏無沼キャンプ場）に関する視察を行った。
- 集落の方々と共に従来の活動をふり返り、今年度の活動に関する意見交換を行った。（集会所）

II. 令和 4 年 8 月 19 日（金）～21 日（日）

- 後東若連（「あばれ山車」の担い手）との打ち合わせ（8 月 19 日）

針道九区の「後東若連」総務を務める今井氏から「あばれ山車」に関する簡潔な説明を受け、「あばれ山車」が諏訪神社の例大祭の一環として数百年も継承されてきた行事であり、疫病退散など災厄を除くことを祈願する神事であると理解できた。だが、祭りの担い手の確保が深刻な問題となっており¹、U ターンや I ターンまたは関係人口が求められている現実を痛感した²。そのため、私達は、昨年度までできなかった「あばれ山車」の運営に参加し、現場から解決策を考えるという方針で臨むことにした。

- 「あばれ山車」の制作（8 月 19 日、20 日）

「山車」に載せる大型人形の骨組みの素材に使う孟宗竹を里山から切り出した。竹を切り出す作業は比較的楽だったが、伐採した竹の運び出しには苦労した。また、人形の骨組みにするために竹を縦方向に八等分する器具を用いて加工する（写真参照）作業はさらに辛かった。しかし、作業の後に開催された懇親会を通して若連の方々と一体感を得ることができたことは、私達にとって貴重な経験となった。



里山から竹を切り出し、8 等分に切り分ける作業



竹を骨組みに大型人形を制作

III. 令和 4 年 9 月 24 日（土）～25 日（日）

- 祭りの準備と交流 ☞ 「山車」の飾り用および集落住民への配布用の「花飾り」づくり。

IV. 令和 4 年 10 月 7 日（金）～10 日（月）

- 祭祀の準備（詰所の設営、パネルの展示、表敬者の対応など）
- 山車の曳き廻し（町廻り、樽神輿など）

¹ 「若連」の構成員は、15 歳～30 代半ばの「諏訪神社」氏子青年層である。針道には全部で七つの若連（町、後東、西、前東、小手森、宮秋、大町）が存在し、各地区若連が「連合会」を組織している。

² COVID-19 感染拡大のため、それまで今回の参加者が若連の方々と対面で話す機会がなかった。



諏訪神社に向かう七若連の山車



上り坂で山車を押す参加者



後東若連とエコ・カフェ菰川



あばれ山車の開会式



山車同士の衝突現場



山車の夜廻り風景

V. 活動成果の取りまとめ

- 検討会（10月～12月）
- ZOOMでのヒアリング（社会システム株式会社）11月29日13時～14時
- 報告用資料・報告書作成（12月～2月）

VI. 令和5年2月11日（土）13:00～16:30

- 令和4年度大学生事業に関する活動報告会（ホテル福島市グリーンパレス2階瑞光の間）

VII. 今年度の活動に関する所感

平成30年度から針道九区で大学生事業を続けてきた私達にとって今年度（令和4年度）は初めての山車の制作・曳廻しの参加であったが、針道の七若連にとっても3年ぶりの一般公開という画期となる祭りの開催であった。後東若連（現役とOBの方々）の指導を受けて取組んだ厄払いや招福を祈念する諏訪神社の例大祭で開催される「針道のあばれ山車」を飾る大型人形制作は私達にとって得難い経験であると考えている。人形の骨組に使用する孟宗竹を里山で伐採して作業場まで搬出し、成形、組み立て、ハリボテ紙の貼付を行うという一連の作業は文系大学で学ぶ私達がキャンパスでは経験しえないものであり、福島民報・福島民友の記者の方から受けた取材もその経験を客観化する貴重な契機となった。若連の方々と協力して取り組んだ山仕事や身体を使う仕事から苦楽の双方を同時に実感できた。また、祭礼本番では宵祭り、町廻り、後祭りで山車を曳かせていただき、最後に、集落内の各家々を巡回しながら踊る樽神輿の催しまで、動画の閲覧のみでは絶対に味わうことのできない臨場感を満喫することができた。以下、参加メンバーの所感を紹介したい。

- 人形の骨組みには120本の竹を使います。山から切り出した直径10cmの竹を専用器具で8分割するだけの作業ですが、竹を持つ人との呼吸を合わせる難しさを知ることができました。（A.N.）
- 坂道の多い針道で山車を曳行する難易度と緊張感は半端ではありません。上りは重く、下りは怖い。地球の重力と鎮守の祭礼に寄せる氏子さんたちの真剣さを心の底から実感しました。（E.T.）
- 力仕事を終えた後に、地元の方々と一緒に話せたのは良い思い出です。こんなに大変な祭礼を毎年続けてきた地域の技術と熱量を肌で感じました。自分も見習いたいと思います。（T.Y.）



福島民報(2022年10月7日付)朝刊



「後東若連」の山車を押すエコ・カフェ萩川のメンバー

- 私の現地訪問は一度だけでしたが、実際に自分の目で見て、現地の人から生の声を聞くことができ、学ぶことがたくさんありました。自分にとって、本当に良い刺激となりました。(S.H.)
- 山車同士のぶつけ合いに参加できなかったのは残念ですが、祭礼の現場を「自分事」と捉えることができた充実感がありました。さまざまな意味で「あばれ山車」は貴重な体験になりました。(T.U.)
- 現地の方と連絡を取りながら、メンバーにも配慮する苦労はありましたが、多くの方々に支えられ、代表者として責任が果たせました。この経験を今後の学生生活に生かしたいと思います。(T.S.)
- COVID-19による苦境から後東若連との協働が生まれました。伝統を継承し、新たな祭礼のカタチを創造する知恵の修得とムラガク連携への挑戦をたたえ、今後の発展に期待しています。(H.N.)



後東若連との集合写真



過去50年余りのポスターを展示



エコ・カフェ萩川の集合写真

VIII. 今年度の成果と今後の抱負

針道集落で地域活性化に取り組んできたエコ・カフェ萩川は、台風19号による交通網の被害や新型コロナウイルスの蔓延という災害や疫病に苦しみながら、そこからの回復を祈る「あばれ山車」という伝統的祭りの運営に参加させていただくことにより、5年目にしてようやく山村に暮らす方々の祭りにかかる思いや濃厚な人間関係を体感することができました。その逞しい精神的風土や人間関係を抜きに千年を超える巨樹のような山村集落の「持続性」を語ることはできないように思われます。3年ぶりの公開となる本祭りに向けて若連の方々と一緒に人形の制作から樽神輿までを行い、親交を深める中で、祭りを維持する集落の力は未来の大学教育に活かせると確信しました。また、そのような思いを今回の参加者全員と分かち合うことができ、現在の大学教育に不足しがちなパーツを発見できたことは私達が後輩達に伝えていける成果だと考えています。さらに、鬼が笑いそうな夢を付け加えさせてもらえれば、今回の私達の成果をモデルケースとして、多くの大学が過疎や少子高齢化という現実と直面しながら、なんとかその危機を乗り越えようとしている農山村集落と絆を結び、自らの教育システムをより実践的なものへと自発的に変革して行ってほしいと願っています。また、本格的に走り始めた針道九区のサポート事業に置き去りにされぬよう、私達も日々の鍛錬を重ねながら走り続けていきたいと考えています。長い間にわたり、お世話になった多くの方々に心から感謝申し上げます。